

2章 「子どもの姿」に注目～視点をもって～

本章では、視点をもって子どもの姿を見たり、記録を取ったりしている園の実践をご紹介します。

子どもたちの育ちを捉えるには、「科学する心」の視点をもって見取ることが大切です。本章実践の各園では、子どもの姿を見取るための視点を明確にもち、記録の記述の工夫をし、読み取りを深めています。この視点をもつことと、記録の工夫は、園内の保育者間の共有にもつながっています。記録はでき得る限り子どもたちのありのままの姿を記述することが望まれます。ありのままの遊びの姿に注目し、視点をもって観ることで、「〇〇遊びをしている」「〇〇（興味の対象）と関わっている」などと、漠然と見ていた時には分からなかった子どもの内面を深く読み取ることが期待できます。「科学する心」につながる体験を読み取るためには、子どものつづやきに注目することはもちろん、夢中になって遊ぶほど、言葉もなく黙々と取り組んでいる姿をも注視することが必要です。また、一見同じ遊びを繰り返しているように見える姿、同じ対象への興味をもち続けている姿も、保育者の鋭い観察力と子どもに寄り添う思いにより、その変容の過程を細やかに捉えることができます。

ねがいに視点を当てて～予想・予測～：実践1「自分の船を滑らせたい」

子どもたちは、遊びの中で見つけた面白さや違和感、疑問などから「こうしたい」という“ねがい”をもって遊びを進め、「科学する心」を育てていることに気づいた。“ねがい”とは、不思議さを感じたり、思いもかけない出来事に出合ったり、思い込みの殻を破る感動体験をしたりする中で面白さを感じて、自分が納得いくまで遊びをやり遂げたいという意欲的な気持ちである。子どもたちは、様々な事象に出会い心を動かすことで、実現したいという“ねがい”をもち、予想・予測して試行錯誤するのではないかと考えた。身近な素材や材料を使って作った船を滑らせる、動かそうと試す姿に注目した。

(P.12:京都市立中京もえぎ幼稚園)



発見や考えに視点を当てて：実践2「あれで試してみればいい」

「自分で考え、試そうとする子どもを育てる」を目指し、動植物に関わる子どもの姿に視点を当て記録を取る中で、子どもが発見したり考えたりする姿に注目した。そして、5歳児が、動植物との関わりで生じた疑問や問題を乗り越えるために、思考をフルに働かせ、試行錯誤する行動力をもつには、3歳児、4歳児に芽生える「科学する心」が影響すると考え、各年齢の成長過程や発達の特徴を明らかにした。本事例では、ザリガニに関わる子どもたちの年齢による違いに焦点を当てた。自分の経験から同化イメージの世界で遊ぶ4歳児と、興味を深めていく過程で生じた疑問や問題を納得するまで友達と考え合う5歳児の姿から「科学する心」の育ちを捉える。

(P.14:福島大学附属幼稚園)



一人の子どもの育ちに視点を当てて：実践3「寝てるだけだと思うよ」

「科学する心を育てる」ためには、一人一人の感じていることを大切にしながら温かいまなざしで見守りつつ、子どもが予測したり、試したりなど、したいこととことんつき合うことが大切なのではないかと考える。一人一人の「科学する心」を見つめると、子どもたちが主体的・対話的で深い学びを通して経験する、その遊びや生活そのものの価値が見えてくる。保育者はそれらを省察し、次の遊び・生活へとつなげてく役割がある。そこで、一人の子どもの心の育ちに視点を当てながら、子どもたちの声や思いに寄り添い共感したり、時に他者に橋渡しをしたりすることで周りとも共鳴しながら増幅していく「科学する心」にも注目していきたい。

(P.16:千葉大学教育学部附属幼稚園)



したいと心が動くプロセスに視点を当てて：実践4「急流すべりを成功させたい！」

子どもは、興味をもったもの・人・ことに出会い、“してみたい”“したい”と心が動き、楽しさ、不思議や疑問を感じて“もっとしたい”、次に“こうしたい”と、自分なりの目標をもつ。さらに思いが膨らみ“してみせる”へと、目標を達成したい強い思いをもつ。5歳児は、今までの経験をいかし、さらに“こうしたい”と友達と試行錯誤しながら目標に向かって進め、その中で、成功やつまずきを繰り返し、“してみせる”と強い思いになっていくのではないかと考えた。この過程を明らかにし、「科学する心」が育まれていくために必要な環境の構成・再構成につなげる。

(P.18:奈良市立都跡こども園)



不思議・発見・探究心に視点を当てて：実践5「どんなものがころがるのかな？」



今年度本園は、「科学する心」を育む保育とは、「不思議・発見・探究心」であると考えた。0歳児クラスから5歳児クラスまで保育者が子どもたちと一緒に楽しみ、夢中になって遊ぶ中に「不思議・発見・探究心」は含まれているのか検証する。方法として、事例を書くにあたって、「不思議・発見・探究心」が、読み取りやすいように、子どもたちが「どういことを不思議に思ったのか」「どんなことを発見したのか」「どのように探究しているのか」「どのように探究していたのか」をできる限り文章で書くようにした。

(P.20:第2長尾保育園)

子どもの育ちや思いを読み解く：実践6「あこがれのかなへびさん」

子どもたちの中に育ちつつある「気づき」や「疑問」の力を発展させ、それが「経験」や「体験」として身についていくには、子どもの中に今何が育っているのかを把握し、それに適した保育者の援助や環境構成が必要であると考えた。そして子どもたちに「どうなるんだろう」「ためしてみたい」という気持ちを育むことで情報が体感に変わるのではと思った。手立てとして子どものエピソード記録を収集し、保育者間で共有し分析することで様々な視点から子どもの育ちや思いを読み解き、“教師力”の向上を目指した。分析の方法として「科学する心」が育つときに芽生える子どもの心の動きを整理し、こういった援助や環境構成を保育者が行ったかを可視化していった。

(P.22:姫路市立中寺幼稚園)

